

〔「福德円満を求めて」展によせて〕

中国の剔彩（紅花緑葉）と鎌倉彫

大和文華館が所蔵する中国・明時代の漆工の名品「紅花緑葉福字文合子」（図1）は、器の全面に吉祥文様が赤や緑、黄色といった様々な色で美しく、緻密に配置されており、その精緻を極めた技術が見どころです。色漆を幾層も塗り重ね、彫る深さを変えることで文様が色分けして表現されます。これは朱漆の層や黒漆の層に文様を彫り出す剔紅や剔黒に対して剔彩と呼ばれる技法です。彫漆は宋時代以降に盛んになり、「堆黒屈輪文大盆」（部分 図2、元時代、大和文華館）のように、二、三色の漆を塗り重ねて層状にし、屈輪文を施して幾層にも重なる曲線文様をあらわすものもあります。

このような彫漆は日本にもたらされて珍重されるとともに、その模倣として鎌倉彫が作られるようになります。中国の彫漆は厚く作った漆の層に文様が彫刻されるため、彫り口は鋭くなりますが、鎌倉彫では木胎に文様を彫刻し、表面に漆を施して仕上げられるため、彫り口はやや柔らかくなる傾向があります。本展覧会では中国の彫漆に影響を受けた作品として、1件だけ江戸時代の鎌倉彫を展示いたします。「鎌倉彫手

筆筒」（図3、大和文華館）です。

この作品は小型の筆筒で、全面に鎌倉彫で文様が施され、さらに、筆筒の中に付属して伝わる文箱や硯箱も鎌倉彫で作られています。手筆筒は正面の観音開きの扉に鳳凰と吉祥花、下段の引き出しに長寿を意味する桃果があらわれます。また、側面及び上面・背面は、各面の中央に稜花形の枠を設けて人物図、その周囲は椿の花があらわれています。これらは一見すると彫漆のようですが、主な人物文様は木胎が彫刻されてその上に朱漆が施されています。また、椿の花は、紅花緑葉のように赤や黄、黒などの色が施されていますが、よく見ると木胎を彫刻した上に花卉や葉などの部分を色漆で塗り分け、剔彩風にあらわされていることがわかります。さらに、文様の背景は花菱文などの幾何学文様が細かく細密に刻まれ、空と水面や陸地が表現されていますが、これらは薄く漆の層を盛り上げてあらわされており、表面を密に削り出して細線を連ねているようです。主な文様と地文様に異なる技法を組み合わせることで表現を変える、複雑な手法がとられています。

手筆筒及び中に納められた硯箱には、中国の故事をもとにした吉祥図があらわされています。手筆筒の背面には、楼台の上で老人が飲食し、その後方では横笛を吹き、上空に鳳凰が舞い降りてくる様子があらわされています。鳳凰は仙界とつながる神聖な生き物で、また、簫や笛など音楽と関係する話が多く伝えられています。漢の劉向『列仙伝』『簫史』にも「吹簫引鳳」の故事が見られます。秦の穆王の娘の弄玉が簫を得意とし、その音は鳳凰の鳴き声に似ていた、鳳台を設けて簫を吹くと鳳凰が飛来し、弄玉と夫の簫史は鳳凰に随って飛び去ったといわれています。

また、正面から向かって右の側面には、列をなして同じ方向へ進む多くの仙人があらわれます。仙人は侍者を伴い各々鶴や雲に乗って空を行き、水上を枯木のようなものに乗って漕ぎ進み、または陸地を歩き、花瓶や盆栽を持つ姿も見られます。同様の図像には西王母の聖誕祭である「蟠桃会」に集う八仙人を描いた「群仙祝寿図」があり、長寿を意味する画題です。八仙人は元代の戯曲に登場し、明代の小説『八仙東遊記』において李鉄拐・漢鐘離・呂洞賓・藍采和・韓湘子・何仙姑・張果老・曹国舅とされます。

八仙人の持物（葫蘆・扇子・宝剑・横笛・花籃・蓮花または蓮葉・魚鼓・陰陽板）は暗八仙と呼ばれ、やはり吉祥文様になっています。

また、付属する文箱は、蓋上に牡丹鳳凰文と「魁」の文字が堆黒であらわされています。魁は北斗七星の第一星をさす魁星であり、文運をつかさどる星として、中国の神とされています。文房具には魁星があらわされたものが多く見られます。同じく付属する硯箱は、蓋上（図4）に朱漆による花菱文を地文として、山奥で釣りをする老人と、そこに訪ねていく老人一行の様子が黒漆であらわされています。具体的な画題は不明ですが、仙人にまつわる話と考えられます。

本作品は、漆工技術や画題に中国からの影響が色濃く、日本が中国の様々な彫漆技法を受けて、技法に工夫を凝らすことで表現の幅を広げていった様子がうかがえます。江戸時代における中国趣味が認められるとともに、漆工技術の高さを伝えています。（瀧 朝子）



図1



図2 部分



図3

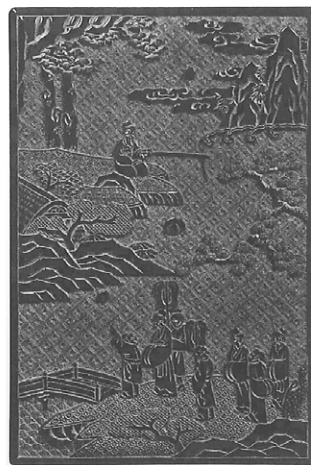


図4

季刊 美のたより No.207

令和元年 7月 6日

発行 大和文華館